

『ペイシャンス』から『ユートピア有限会社』へ — ワイルド、アメリカ、アイルランド

金山 亮太

はじめに

戯曲家ウィリアム・ギルバートと作曲家アーサー・サリヴァンがコンビを組んでヴィクトリア朝後期の演劇界を賑わしたサヴォイ・オペラの演目の一つ『ペイシャンス』(*Patience*, 1881年4月23日初演)は、登場人物の一人である官能派詩人レジナルド・バンソーンがオスカー・ワイルドを想起させるということで特に記憶される。バンソーンは若い女性の気を惹きたいがために、外見のみ唯美主義的な様子をし、思わせぶりなポーズで感傷過多な詩を朗読する鼻持ちならない俗物として描かれており、本作はヴィクトリア朝後期の芸術界を賑わせた唯美主義^{エステティシズム}の皮相性を風刺したものと理解されている。そのアメリカ公演の際にワイルドは、興行主であるリチャード・ドイリー・カートの劇団に同行し、各地で「イギリスの文芸復興」(“The English Renaissance”)「装飾芸術」(“The Decorative Arts”)「美しい家庭」(“The House Beautiful”)などの表題で講演を行った。当時のヨーロッパの芸術風潮に対する知識が乏しい観客が、『ペイシャンス』が何を嘲笑の対象としているのかを予め了解した上で鑑賞できるように、唯美主義の本質を説くためである。ワイルドは行く先々で多くの聴衆を集めたが、彼らに唯美主義の要諦がどの程度理解されたのかは疑わしい。結果的にこのタイアップはワイルドに多額の講演料を、カートに北米公演の大成功をもたらしたただけなのかもしれない¹。ただし、世紀末の風雲児と大衆演劇の興行主が手を組んだ、ウィン=ウィンの関係のようにしか見えないこのエピソードは、その一方で、ワイルドに何らかの変化をもたらしはしなかった

うか²。滞米中に彼が行った講演やインタビューの中に、自らの民族性^{アイリッシュネス}に目覚めたと思しき内容がいくつか見つかるのである³。

滞米初期の1882年3月下旬から4月上旬にかけて、ワイルドはカリフォルニア州サンフランシスコにおいて全日程中で唯一、講演会を4度催した。そこには一大コミュニティを形成していたアイルランド系移民のための、上記の3つとは異なる特別講演が含まれていた。「19世紀のアイルランド詩人と詩」(“Irish Poets and Poetry of the Nineteenth Century”)は、当時独立の機運が高まっていたアイルランド本国への思いを募らせる人々の愛国心に寄り添う内容であった。しかし、この特別講演から伺われるような母国への関心は、これ以降のワイルドの言動の中には乏しくなる⁴。いずれも19世紀に登場しながら今日なお根強い人気を誇るサヴォイ・オペラとワイルドは、いわば後期ヴィクトリア朝文化の象徴である。本論では、ワイルドの講演内容にも触れながら、この2つの象徴の束の間の交わりの背後にあるものを考えてみたい。

1. バンソーンモデルは誰なのか

まずは『ペイシャンス』とは不可分の関係であると考えられているワイルドの姿が、実際にはどの程度この作品に投影されているのかについて検証しておこう。原作者ギルバートは自ら挿絵なども手掛ける人物であり、彼の戯文集『バブ・バラッド』(*Bab Ballads*, 1869)にはエドワード・リア風のいささかグロテスクなスケッチが含まれている。『ペイシャンス』の原作にも彼の手によるバンソーンの原型の姿が添えられているが(図版1)、ぼさぼさ頭に貧弱な体と細い脚、向日葵と思しき花を片手に腰を下ろす男性はワイルドとは似ても似つかない(彼は190センチ近い身長を持ち、蓬髪ではなかった)。その頃



図版1 “Bunthorne” from William Schwenck Gilbert, *Patience* (1880)

の彼は長編詩 *Ravenna* を 1878 年に、さらに第一詩集 *Poems* を 1881 年半ばに世に問うてはいたものの、未だ詩人というよりも文芸サロンの寵児という扱ひであった。『ペイシャンス』の中で、彼の崇拜者である乙女たちの目につくように歩き回りながら、最後の一行に苦吟している様子をバンソーンは見せつける。その直後に彼がもったいぶって披露する詩は自己陶酔的美文調であり、ワイルドの知的な詩とはいささか異なっている。

Bunthorne: Oh, Hollow! Hollow! Hollow!
What time the poet hath hymned
The writhing maid, lithe-limed,
Quivering on amaranthine asphodel,
How can he paint her woes,
Knowing, as well he knows,
That all can be set right with calomel?
(後略)

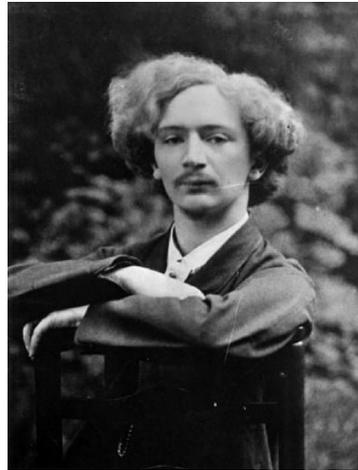
(W. S. Gilbert, *Patience*, Act I, p. 205)⁵

バンソーンは詩が完成した直後に極度の疲労からその場に倒れこみ、たまたま居合わせた近衛竜騎兵隊(乙女たちのかつての婚約者たちである)の隊長に抱きとめられるのだが、そもそも、このように創作上の生みの苦しみに悩む姿を他人に見せることなど、サロンなどで即興的に発せられる鋭い警句^{エピグラム}で名声を博していたワイルドの美意識にはそぐわない。それでは、乱れ髪の詩人バンソーンのモデルは誰だったのだろうか。

ヴィクトリア朝美術を考える際に不可欠なラファエル前派とも関係の深かった D. G. ロセッティ (1828~82) は、肖像画を見る限り若い頃にはワイルドと同様に長髪であったが(図版2)、晩年には半ば世間に忘れられた存在であった。ギルバートが挿絵を描いた段階で念頭にあったのは、世間一般から官能派詩人として目されていた A. C. スウィンバーン (1837~1909) であったと思われる(図版3)。『ペイシャンス』の初演に際してバンソーン役を演じた当代随一の喜劇役者ジョージ・グロスミス (1847~1912) は、ギルバートの挿絵に近い人物造形で舞台上に立った(図版4)。グロスミスは



図版2 Dante Gabriel Rossetti (1847)



図版3 Algernon Charles Swinburne (1870)



図版4 George Grossmith as Bunthorne (1881)



図版5 Napoleon Sarony, "Oscar Wilde" (1882)

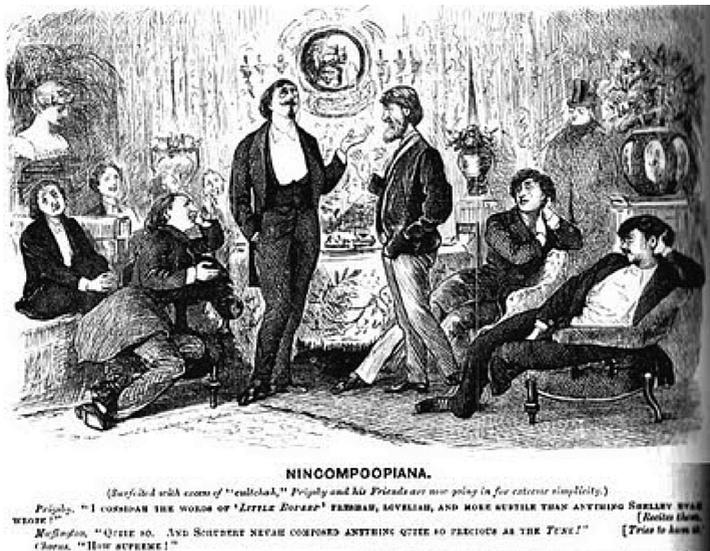
背も低く体格も貧弱だったためにワイルドと外見上の共通点に乏しく、長髪にビロード地の衣装を着てポーズをとる姿は、スウィンバーンに似ている。ワイルド自身、アメリカでこれと似た服装で写真に収まっており(図版5)、むしろ彼が聴衆のためにバンソーン風の衣装を着てみせた可能性がある。しかし、ここで1つ問題が生じる。ギルバートの挿絵もグロスミスが演じた初代バンソーンも片眼鏡モノクルをしていないのに、それ以降のバンソーン役は片眼鏡をして舞台上に現れることが増えていくのである(図版6)。これは、時代が移るにつれて、観客が想起する唯美的人物のイメージが変化していったことに



図版6 John Reed as Bunthorne (1966)

その原因を求めることができるだろう。初演時のバンソーン像がどこまで当時の観客に唯美主義を理解させたかは疑わしいが、『ペイシャンス』の演出において、バンソーンが片眼鏡をするというのは今日ではほぼ定型化している。では、ワイルド自身は片眼鏡をしていたのであろうか。

1841年に創刊された風刺漫画雑誌『パンチ』(*Punch, or The London Charivari*)には挿絵画家ジョージ・デュ・モーリエの手による、唯美主義の芸術家を揶揄するような漫画が1878年ごろから掲載されており、そこには片眼鏡をした人物が繰り返し描かれていた(図版7)。ちなみに、この図版にはワイルドらしき人物も描かれている。背景の右側から二人目の肘をついている男性がそれで、このようなポーズの写真をワイルドは滞米中に何枚も残している。これもまた、ワイルドが漫画を真似しているのかもかもしれない。一方、モーリエはワイルドであると一目で分かるような漫画も描いているが、彼に片眼鏡をかけさせることはない(図版8)。この当時、片眼鏡をした唯美的人物として人々がまず連想したのは、ジャポニズムの



図版7 George du Maurier, "Nincompoopiana", *Punch*. (20 December 1879)



図版8 George du Maurier, "The Six Mark Tea-Pot", *Punch*. (30 October 1880)

影響を強く受けた画家のジェームズ・マクニール・ホイッスラーであった。ここで、『ペイシャンス』の背景と唯美主義の関わりについて再確認しよう。

バンソーンの詩に聞きほれていた乙女たちは、近衛竜騎兵たちに婚約話を蒸し返されると、彼らの軍服の悪趣味な色合いに嫌悪を露わにする。彼女たちは彼らが不在の間に唯美主義に染まり、美意識を完全に塗り替えられてしまっていたのだ。

Jane: [Looking at uniform]: Red and Yellow! Primary colours! Oh, South Kensington!

Duke: We didn't design our uniforms, but we don't see how they could be improved.

Jane: No, you wouldn't. Still, there is a cobwebby grey velvet, with a tender bloom like cold gravy, which, made Florentine fourteenth-century, trimmed with Venetian leather and Spanish altar lace, and surmounted with something Japanese — it matters not what — would at least be Early English! Come, maidens.

(W. S. Gilbert, *Patience*, Act I, pp. 205-6)

乙女たちの一人が赤と黄の原色を用いた軍服を見るなり「サウス・ケンジントン！」と叫ぶこの場面が示唆するのは、1851年の第1回ロンドン万国博覧会の展示物を集めて1857年に建てられたサウス・ケンジントン博物館（現在のヴィクトリア&アルバート博物館）の展示物の色使いが下品だということなのだろうが、当時の人々にとっては常識だったこの地名の含意も、現在の観客は解説なしには理解できない。そういう意味では『ペイシャンス』は当時の流行や常識に対する言及に満ちている作品といえようが、唯美主義に対する人々の関心の高さを物語っている。この後、乙女たちが近衛竜騎兵たちと交わす軍服の色彩に関する会話には、フィレンツェ、ヴェネチア、スペインそして日本などという地名が登場する。ともかくこういった美の先進地と思われる国々の色遣いを真似していれば、少なくとも「初期のイギリス風」^{アーリー・イングリッシュ}を思わせる美意識に近づける、という意味であることは理解できる。これはアーサー王伝説やロビン・フッド伝説な

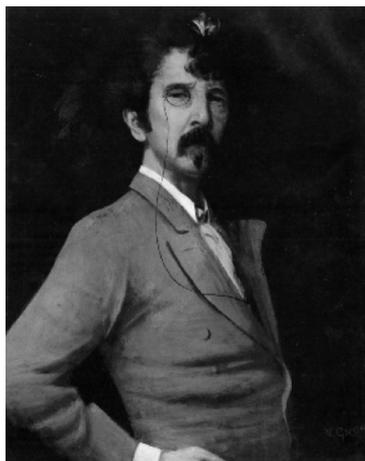
ど、中世の伝説への関心がヴィクトリア朝において復活して絵画や詩の主題になったことと関係があり、ラファエル前派の人々が理想としていた「陽気なイングランド」への回帰志向を指している。

実はバンソーンは村の乳搾り娘ペイシャンスに密かに想いを寄せているのだが、素朴な彼女には高尚な詩など理解できず、幼馴染の元・田園派詩人アーチボルド・グローヴナーと結ばれてしまう。バンソーンのことを慕っていた乙女たちも近衛竜騎兵たちと元の鞘に戻る。結局彼は誰とも結婚できない、という結末を迎えるこの喜劇の第2幕で、バンソーンとグローヴナーが歌の応酬をするところにグローヴナー・ギャラリーという名称が登場する。

Bunthorne: A pallid and thin young man,
A haggard and lank young man,
A Greenery-yalley, Grosvenor Gallery,
Foot-in the grave young man!

(W. S. Gilbert, *Patience*, Act II, p. 241)

グローヴナーという名前が、ラファエル前派や唯美主義者たちの本拠地となる1877年設立の画廊に由来することは当時の観客には周知のことであった。ここに出品した自作の「黒と金の夜想曲」を酷評した美術評論家ジョン・ラスキンに対してホイッスラーが訴訟を起こしたことで、この画廊はさらに知名度を高めた。ワイルドに対しても美術論争を繰り広げるなど、何かと世間を騒がせたり醜聞的になったりすることの多かったホイッスラーは、その肖像画では必ず片眼鏡をしている(図版9)。



図版9 Walter Greaves, "Portrait of James Abbott McNeill Whistler" (1871)

彼は奇矯な言動やダンディズムに徹した装いで当代随一の唯美的人物と認知されており、だからこそ画家でもないバンソーンが舞台上で片眼鏡をかける演出につながったのであろう。バンソーンはスウィンバーンの外見という元^{プロトタイプ}型に、片眼鏡に象徴されるホイッスラー的の要素が上書きされている。ワイルド風の衒いがその台詞にはあるものの、本質的に彼とは異なっていることは明らかであり、『ペイシャンス』とタイアップしたという理由で彼のことが連想されているに過ぎないのである。しかし、演技的人物(histrionic)であったワイルドは、自らに期待されている役柄を演じたり漫画を真似たポーズで写真を撮ったりすることに密かな喜びを見出しているはなかっただろうか。「素顔で語る時、人はもっとも本音から遠ざかる。仮面を与えれば真実を語り出す。」(“Man is least himself when he talks in his own person. Give him a mask, and he will tell you the truth.”)という彼自身の警句そのままに、唯美主義者の歩く見本としての自らの役割を全うするために、彼は営業用の「仮面」をつけていたのかもしれないのである。

2. ワイルドは愛国者なのか

Speranza's Son
Oscar Wilde Lecture on What He
Calls the English Renaissance

—————
The Utterness of Aestheticism

—————
Phrasing about Beauty while
a Hideous Tyranny Overshadows
His Native Land

—————
Talent Sadly Misapplied⁶

1882年1月14日にニューヨークで発刊された新聞『アイリッシュ・ネーション』(*The Irish Nation*)の1面を飾った見出しは、母親スペランサは愛国的な詩を数多く発表してきたというのに、息子はアメリカ人相手に「イ

ギリスの文芸復興」などという主題で講演をして回っていることに不満を鳴らす。「才能の無駄遣い」という一行には、ワイルドの弁舌をもってすれば母国の窮状を広く世界に訴えられるのに、と齒噛みするアイルランド系移民の思いが透けて見える。エリザベス朝以来のイングランドによるアイルランド支配は、1801年の連合法によって強化され、ワイルドの同郷人の不満は高まる一方であった。1880年にチャールズ・ステュアート・パーネルを党首に選んだアイルランド国民党は祖国の自治運動を主導し、ワイルドが渡米した時期にはアイルランド議会党となり、イギリス本国の自由党、保守党に対抗して自国の自治拡大を訴えていた。そのような中、ワイルドはカリフォルニア州サンフランシスコで「19世紀のアイルランド詩人と詩」という講演のために、同市のプラッツ・ホールに1882年4月5日に姿を見せた。これは同年3月17日（アイルランドの守護聖人である聖パトリックの日）にミネソタ州の州都セント・ポールで、彼が母国に関する即興の演説を行ったことを聞きつけたサンフランシスコのアイルランド系移民たちが、当地でも母国のことを話すように要望したことから実現したものであった⁷。その内容に入る前に、彼が講演用に準備していた主要な3つの題目について確認しておきたい。

「イギリスの文芸復興」、「装飾芸術」、「美しい家庭」の3題目は互いに関連しあっており、その根底に流れるのはアメリカの持つ潜在能力に対するワイルドの期待と、目下のところその能力が物質主義の影響で十分に発揮されていないことへの不満である。渡米の1週間後の1882年1月9日にニューヨーク市のチカリング・ホールで幕を落とした講演旅行第1回目の題目「イギリスの文芸復興」においてワイルドは、イギリスにおける文芸復興の端緒をフランス革命に求め、理性や実用性重視の18世紀的価値観が人間性や自然に目を向けるロマン主義へと向かったと説明する。その上で、ジョン・キーツをラファエル前派の先駆と捉え、文学と美術とを結び付ける。次に彼が説くのはアメリカにおける文芸復興である。まだ生まれてから日の浅いこの国は、物質主義の段階に達したばかりだが、これからは真の芸術を生み出すような国民になるべきだというのである。アメリカ人の聴衆に対するリップサービスが込められていたのであろうこの講演は、しかし、はかばかしい反応を得られなかった⁸。ワイルドという「見世物」にこそ彼

らの興味はあったからである。

ニューヨーク州イサカ市のオペラハウスで1882年2月6日に初日を迎えた「装飾芸術」は、「イギリスの文芸復興」の続編あるいは実践編とも呼ぶべきものであり、聴衆にとって馴染みやすい内容にしようという工夫の跡が見て取れる。ワイルドの目にはアメリカには粗悪な大量生産の商品が満ちているように映っており、ちょうどイギリスにおいてウィリアム・モリスが実践して見せたような、芸術家と職人とが一体化した工房で真に美しいものを生み出す必要があると彼は主張する。そのためには芸術的感性を養うような学校を作って職人を訓練すべきであり、真に美しいものとは何であるかを一般の人々に伝えるために博物館を建設する必要があることも訴える。今のアメリカ人はただ単に人生を送っているだけで、本当の意味で生きているとは言えない。真に生きるとは、美を愛する心をもって日常を送ることであり、そのためには人々の美意識をもっと高めなければならない、とワイルドは強調する。「装飾芸術」と題されている通り、身近なところに美的感覚を養うヒントがあることを指摘するワイルドは、次世代を担う子供たちに美意識を持たせることの重要性を説いており、これは子を持つ母親たちを視野に入れた講演だったと言えるであろう。

残る「美しい家庭」は1882年3月11日にイリノイ州シカゴで初めて行われたが、これも題目から明らかのように、家庭を主たる美意識醸成の場として捉えた内容であり、「装飾芸術」とその主張は重なる。やはり女性の聴衆を意識した内容となっており、ワイルドの狙いが唯美主義の本質を語るという本来の目的から、それを日常の中で実践してゆく必要性を説き、実際にその方法論を示すことに移っていることが分かる。いずれの講演も、その目的は真摯なものであり、堂々とした内容を備えていた。オックスフォード大学出の秀才ワイルドの面目躍如といったところであろうか。彼は相手が自分に求めていること、そして自分にできることを冷静に判断し、最善を尽くすことのできる優秀な講演者だったのである。抽象的な議論では聴衆の興味を維持できないと悟るや、相手のレベルに合わせて内容を改訂し、より親しみやすい表題を掲げて関心を引くというのは、テーマの本質への正確な理解と優れた表現力がなければ不可能である。聴衆を飽きさせないためには、敢えて彼らが望むような唯美主義者の姿で登場する

といった道化めいた真似もワイルドは厭わなかった。傲慢で自意識過剰な印象に目が奪われがちではあるが、彼の中には地道な努力家の側面と有能なセールスマンの側面もあったのである。

このように、あくまでも興行主の意向に沿って講演旅行をしていたワイルドがアイルランド人としての個人的心情を吐露する最初の機会は1882年3月17日に訪れた。前日に「装飾芸術」の講演をセント・ポール市内のオペラハウスで既に終えていた彼は、翌日も同じ会場に姿を現し、一聴衆としてアイルランド系移民の愛国的演説を拝聴していた。しかし、1848年の蜂起の時のことを歌った詩人の息子であるという紹介の後に指名を受けた彼は、即興の演説で母国の文化に対する誇りを訴えた。翌日の同市の『デイリー・グローブ』紙(*Daily Globe*)はその内容を次のように伝える。かつて文化的にはヨーロッパの頂点に立っていたアイルランドは、ヘンリー2世以降のイングランドによる侵略でその栄光を失い、以来700年以上が経過した、とワイルドは語る⁹。

…芸術とは自由と美とを愛する国民によって表現されるものであり、たとえ本国では発揮することが許されなくとも、アイルランド系の人々の中には芸術的感性が残っている。その気持ちがあればこそ、今夜ここに集って守護聖人の記念日を祝っているのである。生まれ故郷のあらゆる辺地、丘、小川に対して抱いている愛情にその気持ちは現れている。アイルランドの歴史に光を投げかけてきた偉人たちの行動や仕事に対する敬意の念にもそれは見て取れる。アイルランドが独立を遂げた暁には、その芸術や学問分野は復活し、ヨーロッパの国々の中でかつて味わっていた誇りある地位を占めるようになるだろう。

母親への敬意を示してくれた出席者一同に感謝の意を伝えてワイルドは演説を終え、大きな拍手を受けた、と記事は伝える。アメリカの同胞を激励した彼の中に民族意識が芽生えたのではないかと考えるのは自然なことであろう。サンフランシスコでの特別講演に備え、ワイルドは入念な下調べを施して本番に臨んだ。マシュー・アーノルドの『ケルト文学についての研究』(*On the Study of Celtic Literature*, 1867)を種本とし、20人近いアイ

ルランド詩人を紹介したその講演は¹⁰、カトリック教徒解放運動の指導者だったダニエル・オコンネルの詩「アイルランド亡命者の気持ち」を引用し、締めくくりは彼自身の母の詩の朗読であった。少女が墓の花束をワイルドに贈呈したとき、会場は再び拍手に包まれ、彼は微笑んで恭しくお辞儀をしたという¹¹。

彼の滞米中、自身の民族性からめた発言はそれ以降も見られた。1882年6月24日、ルイジアナ州ニューオーリンズで現地の新聞社 *The Picayune* 紙の記者に南部(アメリカ連合国)の元大統領ジェファーソン・デイヴィスに会いに行くそうだが、と問いかけられた彼は、次のように答えている。

南北戦争での南部の立場は、私の考えでは今日のアイルランドの立場と非常に似ている。それは帝国が分割されるのを見る闘争ではなく、アイルランド国民が自由になるのを見、アイルランドがそれでもなお自ら進んでイギリス帝国の不可欠な一部たらしんとする闘争だった。(中略)しかし、進歩のために最大の結果を得ることができるようになる前に、まず自由と自治が人々の手になければならない。これが南部の人々に対する私の感情であり、母国アイルランドの人々に対する感情でもある。ジェファーソン・デイヴィス氏に会うことを大いに楽しみにしている¹²。

アメリカ深南部に残る南軍びいきの感情に配慮したとも考えられるこの発言には、国の分裂は望ましいことではなく、アイルランドはあくまでも自治権を認められつつ連合王国の一員でいるほうがいい、という彼の考えがにじみ出ている。南北戦争によって傷つきながらも統一国家として復興しようとしていたアメリカを支持するワイルドの中には、やはり同じように虐げられてきた母国への思いがあったはずなのだ。それにも関わらず、サンフランシスコで成功を収めたこの講演を彼が定番化しなかったのはなぜだろうか。アイルランド系移民が多い地域だったために可能になった講演ではあったが、シカゴやニューヨークなど、他にも条件の似た都市はいくつもあった。母国において独立の機運が高まっていたこの時期に、彼の講演を通してアメリカ全土に散らばっているアイルランド系移民の自覚と団

結を促し、イギリス政府に揺さぶりをかけることができたかもしれないのである。

実はワイルドにとってこの種の発言は、聴衆の聴きたい話を披露するという、彼お得意のリップサービスの延長だったのかもしれない。あるいは政治的な話題に首を突っ込むことは彼の人生哲学に反したのかもしれない¹³。唯美主義者の仮面で巧みな演技を見せていたワイルドが、ここでは民族主義者の仮面をかぶって見せたと考えるのは穿ちすぎであろうか。いづれにせよ、10か月以上に及ぶ北米大陸を巡る講演旅行の中で、この「19世紀のアイルランド詩人と詩」は日の目を見ることもなく、埋没していくことになる。アメリカでひととき交わったワイルドとサヴォイ・オペラの関係はこの後、復活することはなかった。

3. アイルランド自治問題と『ユートピア有限会社』

ワイルドがアメリカ講演旅行を終えてから11年後の1893年10月7日、サヴォイ・オペラの新作『ユートピア有限会社』(*Utopia Limited*, 1893)がサヴォイ劇場で初日の幕を開けた。南の島ユートピア国の王女ザーラが留学先のイギリスから帰国するや、祖国の制度をすべてイギリス風にするという改革を断行する。その結果、あまりにも理想的な国家体制が完成したために病人も犯罪者もいなくなる。失業した医者や判事や警官たちが巷に溢れ、彼らの不満が社会転覆の不安を掻き立てる。ここで王女が妙案を思いつく。イギリスの諸制度のうち、「政党政治」だけは導入していなかった。これを採用すれば、政権与党が交代するたびに国の政策は変更を余儀なくされ、あちらこちらに矛盾と混乱が生じ、再び病人や犯罪者の蔓延する社会に戻るに違いない。そうすれば、失業者の不満も収まり、万事解決する。かくして、彼女をはじめ王女たちはみなイギリス人と結婚し、国王パラマウントまでが王女の元家庭教師(イギリス人女性)と結婚するという筋立てである。あけすけなイギリス礼賛を前面に打ち出したこの作品におけるギルバートの狙いは、このような理想的な国が、実際は混乱を内包した普通の国でしかないことを観客に突きつけて居心地の悪い思いをさせることにあり、それと同時に、愛国心を鼓舞しようとする当時の風潮に風刺の矢を射かけることだったのかもしれない。いわば、舞台上のユートピア国の

ドタバタを笑う観客自身が自らの戯画を笑うという二重構造がそこには仕組まれていたのである。

このような筋書きとは別に、この作品には時事的要素も含まれていた。ワイルドが渡米中の1882年5月6日、イギリス自由党のアイランド担当相フレデリック・チャールズ・キャベンディッシュ卿がアイランド人愛国者によってダブリンで暗殺される事件が起こっていたし¹⁴、W. B. イェイツやグレゴリー夫人などを中心にアイリッシュ・ルネッサンスの動きが生まれつつあった。アイランド人の愛国心はこの時期、大いに高揚していたのである。また、この劇にはタララという公衆爆破係(Public Exploder)が登場する。その名がダブリン郊外の聖地タラの丘に由来し、1890年代にアイランドの各地で頻繁に起こった爆弾テロにちなんでいることを観客は承知していた。さらに、この劇の最後には、アイランドがイギリスからの独立を目指していることを揶揄するような歌詞が登場する。

King: Oh, may we copy all her maxims wise
And imitate her virtues and her charities;
And may we, by degrees, acclimatize
Her parliamentary peculiarities!
By doing so, we shall, in course of time,
Regenerate completely our entire land —
Great Britain is that monarchy sublime,
To which some add (but others do not) Ireland.

(W. S. Gilbert, *Utopia Limited*, Act II, pp. 684-5)

国王が最後に付け加える「大英帝国こそわれらが崇高なる君主、それにアイランドを加える人もいれない人もいる」という一節は、かなり際どい歌詞である。ワイルドが考えていたような、アイランドは帝国の一部として留まるべきかどうかはここでは問われている。一触即発寸前の状態になっているアイランド自治問題をこのように弄ぶことで矮小化する狙いがギルバートにあったのかどうかは分からないが、イギリスのことを「褒め殺し」とでもいうべき過剰な言葉で礼賛する一方、アイランドにも

言及することで観客にスリルを味わわせるという、アクロバットのな台詞回しであると言えるだろう。

一方、この頃のワイルドは長編小説『ドリアン・グレイの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*, 1891) や短編小説を矢継ぎ早に発表する一方、『ウィンダミア卿夫人の扇』(*Lady Windermere's Fan*, 1892)、『つまらない女』(*A Woman of No Importance*, 1893) などの風俗喜劇にも手を染めていた。『サロメ』(*Salomé*, 1892 フランス語による執筆) は国内上演が禁じられたものの、まさしく彼は絶頂期を迎えていた。しかし、この時期の書簡には彼が母国の自治問題をどう思っていたのかは一切書かれていない。私生活が乱れていた彼は、母国の困難に対して発言するどころではなく、文壇を泳ぐことに腐心していたのかもしれない。かつて滞米中に彼の中に自覚されたと思いき民族性は消えてしまったのか。唯美主義者を演じて見せたときと同様、民族性もまた必要に応じて身に着けた仮面に過ぎなかったのか。「仮面を与えれば真実が語られる」のだとすれば、その下にはどのような素顔があったのだろうか。求められる人物像を演じるための仮面が彼には多すぎたのではなかったか。「人生にこそ精魂を注ぎ込んだ」と嘯いていたワイルドの人生の終幕は数年後に迫っていたが、彼自身、自らの本性や真実が分からなくなっていたのではないかと察せられるのである。

註

- 1 ただし、ワイルドの出費も多額だったために、半年で数百ポンドの儲けしかなかったようである。Lloyd Lewis and Henry Justin Smith, *Oscar Wilde Discovers America* (New York: Benjamin Blom, 1967 reprinted, original publication 1936), pp. 442-443.
- 2 Lewis and Smith, p. 443. 「ワイルドはアメリカを変えなかったが、アメリカはワイルドを変えた」とLewisとSmithは言うが、唯美主義者の格好をやめ、髪を切ったという外見上の変化について述べるにとどまっている。
- 3 ただしワイルド自身はアングロ・アイリッシュであり、ケルト系ではなかった。
- 4 たとえば彼の書簡集の索引には「アイルランド」の項目が存在しない。Rupert Hart-Davis (ed.), *The Letters of Oscar Wilde* (London: Rupert Hart-Davis, 1962) を参照。
- 5 Ed Glinert (ed.), *The Savoy Operas: The Complete Gilbert and Sullivan* (London: Penguin, 2006). サヴォイ・オペラの引用は、すべてこのテキストによるものと

- し、以降は幕とページ数のみを示すこととする。
- 6 Richard Ellmann, *Oscar Wilde* (London: Penguin Books, 1988), pp. 185-186.
- 7 <http://www.oscarwildeinamerica.org/lectures-1882/april/0405-san-francisco.html>
(最終閲覧日2017年7月31日)より。現地の新聞 *Daily Alta California*, April 2, 1882の記事にある。これは *Oscar Wilde on Dress* (CSM Press, 2013)の著者 John Cooperの運営するサイトの一部。ホームページのタイトルは“Oscar Wilde In America: A Selected Resource of Oscar Wilde’s Visits to America” (<http://www.oscarwildeinamerica.org/index.html>)。以下、ワイルドのそれぞれの講演内容については、全集に収められた文章と本ホームページに掲載されている抄録からまとめた。
- 8 Lewis and Smith, pp. 60-61. 多くの新聞はワイルドの講演内容については紙面を割かず、出稼ぎにきたこの唯美主義者を嘲笑するような短評を掲載した。
- 9 <http://www.oscarwildeinamerica.org/features/st-patricks-day-1882.html> (最終閲覧日2017年7月31日)より。 *Daily Globe*の記事は拙訳による。
- 10 <http://www.oscarwildeinamerica.org/lectures-1882/april/0405-san-francisco.html>
(最終閲覧日2017年7月31日)より。
- 11 Lewis and Smith, pp. 269-270.
- 12 Lewis and Smith, pp. 366-367. この記事を読んだニューオーリンズ市民は一気にワイルドびいきになり、講演会に詰めかけたという。
- 13 Lewis and Smith, p. 41. *The Philadelphia Press*の記者に、政治的には自由党か保守党かと尋ねられたワイルドは、「そういうことには関心がない。文明と野蛮という二つの用語だけは知っている。私は文明側の人間だ」と答えた。
- 14 Lewis and Smith, p. 244. この事件についてコメントを求められたワイルドは、「自由が血塗られた手で来るときには受け入れがたい。イギリスに責任がある。7世紀もの不正の実を手に入れているのだ」と語った。

参考文献

- Brown, Thomas N. *Irish-American Nationalism 1870-1890* (Philadelphia & New York: J. B. Lippincott Company, 1966).
- Ross, Robert ed. *The First Collected Edition of the Works of Oscar Wilde 1908-1922* 15 volumes (London: Dawson of Pallmall, 1969).